

仮想現実の設定とソ系列指示詞

——古代日本語を中心に——

藤 本 真理子

So- Demonstratives Indicating Virtual Reality

——Focusing on Early Japanese——

FUJIMOTO Mariko

Abstract : Most research conducted so far regards the anaphoric use as the main use of *So*-demonstratives, while the vague use is considered marginal. On the other hand, this paper, following the views of *Kinsui* and *Okazaki*, analyses the vague use (*aimai* use) of *So*-demonstratives as an extension of the anaphoric use. Furthermore, it clarifies the mechanism of *So*-demonstratives, showing that they take over the descriptive meaning of the previous verbal expression when it exists, or can stay blank if there is no such meaning to take over. This argument allows us to explain, in a unified manner, vague use *So*-demonstratives, anaphoric use *So*-demonstratives, as well as the *So*-demonstratives used to refer to a subject in the hearer's territory, which were established at a later date. In this paper we show that the hearer-vicinity use, which arose from the need to show politeness to the hearer, eventually became imprinted on the blank *So*-demonstratives (that take over no previous meaning), over several centuries of usage.

KeyWords : *So*-demonstratives, anaphoric use, vague use, Virtual Reality

要旨：ソ系列指示詞の中心的用法は、文脈照応用法であり、曖昧指示の用法は周辺的なものと説明されることが多かった。しかし本稿では、金水・岡崎などの論考に従い、曖昧指示の用法を捉えた結果、これらの用法がソ系列の文脈照応用法からの連続であることを認めた。さらに本稿は、ソ系列の指示のメカニズムが先行する言語表現の記述的意味がある場合は引き継ぎ、ない場合は引き継がずに空欄のままであると規定した。その結果、文脈照応用法、曖昧指示の用法に加え、時代は遅れて確立した聞き手領域指示も統一的に説明できることを述べた。すなわち聞き手への配慮からできた聞き手指示用法は、空欄となっていた（先行詞のない）ソ系列指示に繰り返し使われることにより、意味が焼きついたと見ることができる。

1 はじめに

現代語では、次のように指示対象が曖昧なソ系列指示詞の例がある。

- (1) A：お出かけですか？
B：ええ、ちょっとそこまで。
- (2) A：テレビのリモコン、どこにあるか知らない？
B：さあ、その辺にあるんじゃない？

(1) (2) に挙げたソ系列指示詞の「そこ」「その辺」は、言語外世界に確定的な値をあらかじめ持っていない。もちろん (1) であれば、問いかけた A は、指示対象の同定が行えないものの、答える B には「公園」であったり、「スーパー」であったりと出かける先があるかもしれない。しかし、それは、指示詞「そこ」によって、指し示されるものではなく、次にあげるような指示対象をもつ例とは異なる。

- (3) (道を尋ねられたので、前方のポストを指さして)
そこにポストが見えるでしょう。

- (4) 昨日、公園に行ったんだ。そしたら、そこでお祭りをしていたよ。

(3) (4) では、波線部によって言語外世界の対象を同定できる。また (2) では、話し手さえも確たる対象を持たずにソ系列の指示詞は用いられている。このような用法は、ソ系列に古くから見られる一方、コ系列やア系列の指示詞にはないものである。(1) (2) のような例は、(4) のような文脈照応の用法に対し、周辺の用法として捉えられることが多かった。しかし、金水 (1999)、岡崎 (2006) などにより、これらは「今、現在目に見えない、感覚できない対象の指示」として文脈照応用法と連続した用法であったことが指摘されている。本稿でも、これらの用法はソ系列の本来の用法から生じたものとして捉え、周辺のものとは見なさない立場をとる。

筆者はこれまで、古代語から現代語にかけて、日本語に見られるコ・ソ・ア3系列の指示詞の指示領域が接近したり、離れたりする様相をそれぞれの用法の検討により示してきた (藤本 2008 a; 2008 b; 2009)。指示詞の歴史的变化の大枠については、先行研究でも述べられてはいるものの、その要因についての言及は十分とは言えない (岡崎 2002, 金水・岡崎・曹 2002)。本稿では、ソ系列の指示のあり方を検討することによって、指示詞の体系に歴史的变化が生じた要因を改めて考察することを目指す。

2 ソ系列による指示

本節では、ソ系列指示詞による用法を分類して見ていく。

2.1 曖昧指示表現・否定対極表現

ソ系列による具体的なイメージを表わさない表現として、(1) (2) の他に、次のような例が挙げられる。

- (5) A: どうやって毎日の献立を決めていますか?
 B: その日の気分と冷蔵庫の中身で決めています
 あなたは?
 A: 私もそれほど深くは悩みません。

このようなソ系列の曖昧指示表現は、指示対象として特にその記述的意味を引き継ぐ先行表現はない。そのため、(5) の「その日の気分」のソ系列は変項 X を含んでおり、(6) のように考えられる。

- (6) その日 (X) の気分
 ↳ X = (A の日 - A の日の気分, B の日 - B の日の気分, …)

これは「この日 (あの日) の気分」といった他の系列の指示詞では特定の日を指し示すことになるため、ソ系列以外の指示詞では表し得ない。同じく (1) (2) の場合も、何らかの値はあるが、意図的にせよそうでないにせよその値を言わない、指示対象を特定しないという理由からソ系列が選択されている。このような表現は、岡崎 (2006) では曖昧指示表現 β に分類されており、曖昧指示表現には α と β の二種が認められている。しかし、これは慣用化した表現であるか否かが分類の主な基準となっているため、ここでは特に分けて扱うことはしない¹⁾。このような曖昧指示表現のソ系列は、現代語だけでなく、古代語でも次のように用いられている。

- (7) a. さてときへ一通ひけれど、いかなる人のすかすならんとつゝ、まじかりければ、人にもそこへとも言はで通ふほどに、みな人物へいにけり。【女の方も、どこそこであるとも言わないで】（日本古典文学大系、大和物語、352 頁）
- b. [惟光→源氏]「その人とはさらにえ思ひえはべらず。」【どの人だとはまったく見当がつかかねております。】（源氏物語、夕顔、1: 149）

また岡崎（2006）では、曖昧指示表現の他、ソ系列（指示副詞サ系列も合わせて）に（5）に挙げた「それほど〜ない」のような否定対極表現も設けられている。そこでは、否定対極表現が先行する言语文脈から一般知識領域の情報を活性化させ、それに加えてスキーマを参照、推論した結果、指示を行うとして説明される。

しかしながら本稿においては、曖昧指示表現、否定対極表現と話し手の心的領域との作用に関する詳細な分析を目的とはせず、これらの表現がどれもソ系列による指示の、値を伏せるという働きから成り立っていることを確認するに止めておく。「それほど〜ない」の「それ」がどれほどであるかは定められておらず、慣用的に用いられている。（5）のような否定対極表現に関しても、ソ系列によって特定の値が指し示されていないという点で曖昧指示表現と共通している²⁾。

2.2 文脈照応用法

前節のような、特定の値を指し示すことのない働きに対し、古代語から現代語まで各時代を通じてソ系列の主な用法であると考えられる文脈照応用法では、ソ系列は先行する言语文脈の記述的意味を引き継いでいる。次に示すのはソ系列の文脈照応用法の例である。

- (8) a. かの所をこそさも領ぜられめ、このとしごろ造りつる草木を、もの入れて。それ運び取り給へ。（落窪物語、第三、203 頁）
- b. [僧都]「故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが姉妹にはべる。」（源氏物語、若紫、1: 213）
- (9) a. [源氏]「かの、ありし中納言の子は得させてむや。らうたげに見えしを、身近く使ふ人にせむ。上にも我奉らむ」とのたまへば、[守]「いとかしこき仰せ言にはべるなり。姉なる人にのたまひむ」と申すも胸つぶれて思せど、[源氏]「その姉君は朝臣の弟妹やもたる」（源氏物語、帚木、1: 105）
- b. [命婦]「もて離れて、似げなき御事とも、おもむけはべらず。ただおほかたの御ものづつみのわりなきに、手をえさし出でたまはぬとなむ見たまふ」と聞こゆれば、[源氏]「それこそは世づかぬことなれ。[...]」（源氏物語、末摘花、1: 277）

文脈照応用法の中には、次のように仮定を表す例も見られる。（10 a）は現代語、（10 b）は古典語の例である。

- (10) a. [仮定] もし特急が止まっていたら、|*これ/それ/*あれ|に乗っていこう。
- b. [仮定] かの人もし世にものしたまはば、それ一人になむ対面せまほしく思ひはべる。【[浮舟]「もしあの母君がこの世においでになるのであれば、その人お一人だけにはお会いしたいと思うのでございます。】」（源氏物語、夢浮橋、6: 389）

また、他の系列の指示詞とは違って、ソ系列が先行文脈の記述的意味を受け取る方法をもっとも明確に表しているのが、次のような例である。この例では、未来や非現実の対象をソ系列が指し示している。

1) 曖昧指示表現 α については、岡崎（2006: 83）では次のような例が挙げられている。

(i) 敵もさる者（なかなかの者）、しかるべき手続き（適切な手続き）

2) 金水（1999: 84）でも述べられるように、否定対極表現は最終的に否定されるような量を仮定している。このことから、後に述べる文脈照応用法とも関連している。

- (11) a. [未来] 1時間後に会社の者が受け取りに来ますから, |*この/その/*あの| 者に渡してください。
 b. [非現実] もしあの時買った宝くじが当たっていたら, |*この/その/*あの| 金を頭金にして家が買ったのになあ。(11) はともに金水・田窪 (1992: 137) より引用)

これは、ソ系列の枠組みが言語的表現によってのみ決められるため、上記の例のように、対象が未来や非現実のものであっても、ソ系列はそれを指し示すことができるのである。しかしコ系列やア系列では、現実世界に対象を探索しにいくため、このような場合用いることができない。古代語でも同様にソ系列が未来や非現実の対象の指示に用いられる。(12) は未来の例である。

- (12) a. [未来] [あこぎ→帯刀] 「あす祭り見にいで給ぬべかめり。そのひまにおわしませ。」(落窪物語、第二、113頁)
 b. [未来] [源氏] 「宮へ渡らせたまふべかなるを、その前に聞こえおかむとてなむ」(源氏物語、若紫、1: 253)

ソ系列の指示は、未来に限らず、ものごとの仮定であれば可能である。そのため、次のように反事実の要素に関しても、反実仮想文において導入された対象をソ系列が指し示している。

- (13) a. [反事実] なみなみの人ならばこそ, 荒らかにも引きかなぐらめ, それだに人のあまた知らむはいかがあらむ, 心も騒ぎて慕ひ来たれど, 動もなくて, 奥なる御座に入りたまひぬ。【相手が普通の男ならば, 手荒に引き離しもしようが, その場合でも, 大勢の人に知られるのはどんなものであろう, 中将は胸を騒がせて後については来たけれども, 君はいっこうかまわず奥の御座所に入っておしまいになった。】(源氏物語、帯木、1: 100)
 b. [反事実] まだ世に馴れぬは, 五六の君ならむかし, 帥の宮の北の方, 頭の中將のすさめぬ四の君などこそ, よしと聞きしか, なかなかそれならましかば, 今少しをかしからまし, [...]。【まだ世慣れないのは, 五の君か六の君だろうな。帥宮の北の方や, 頭中將の気に入らぬ四の君など器量よしとの評判だったが, むしろそういう女だったら, もっとおもしろかっただろうに。】(源氏物語、花宴、1: 358)

これら (10)～(13) の文脈照応用法からは、言語的先行文脈がある場合、ソ系列がその言語的先行文脈から記述的意味を受け取って指示対象とすることが確認できる。

2.3 観念指示用法

2.1, 2.2 から、ソ系列は言語的先行文脈があればその記述的意味を指し示し、ない場合は「その日暮らし」などそのまま不定項 X として指示対象が特定されず、空欄であることが分かる。本節では観念指示用法についても、同様の働きが確認できることを述べる。

観念指示用法は、岡崎 (2002) では「言語テキスト内に先行詞もなく、今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象もないもの」と定義され、上代には次のような例がある。

- (14) a. かくばかり恋ひむものそと知らませば その夜はゆたに [其夜者由多尔] あらましものを【こんなにも恋しくなると知っていたら, あの夜はもっとゆったり過ごしたものを】(萬葉集、巻12, 2867)
 b. には鳥の葛飾早稲をにへすとも そのかなしきを [曾能可奈之伎乎] 外に立てめやも【(には鳥の) 葛飾早稲の稲を神に供える時でも, あのいとしい人を家の外に立たせなどするものか。】(萬葉集、巻14, 3386)

これらのソ系列は、あえて現代語に置き換えるならば、ア系列で表現されると言われるように、話し手のよく知

っている対象を指し示している。しかし、結局このような観念指示の用法においても、ソ系列のふるまいは2.1で見た曖昧指示表現と基本的に同じであるといえる。なぜなら、ここでのソ系列は、先行する文脈から記述的意味を引き継いでいるとも、引き継いでいないとも見ることができるためである。たとえば(14 a)であれば、「かくばかり…」という先行文脈によって、指示対象が導き出される世界はある程度限定される。

これと類似した働きは、次の現代語のア系列の観念指示用法においても確認できる。

- (15) a. きのう、山田さんに会いました。あの人、変わった人ですね。
b. (夫が長年連れ添った妻に) おい、あれを出してくれ。((15) はともに金水(1999: 72)より引用)

つまり観念指示用法も含め、ソ系列の指示のあり方は先程までに見たとおり、言語的な先行文脈がある場合はその記述的意味を引き継ぐということで統一した説明を行うことができる。

3 ソ系列指示詞の歴史的変化

前節ではソ系列の曖昧指示表現・文脈照応用法・観念指示用法が、それぞれが連続したものであったことを確認した。これらの用法のうち、現代語では、曖昧指示表現の一部は「どこ・だれ」などのド系列、また観念指示用法はア系列と結びついている。

ソ系列から別の系列が担うようになった歴史的変化もある一方で、もともとソ系列の用法として確立していなかったものにも、時代とともに生じた用法がある。まず、指示詞の歴史的変化を押さえた上で、ソ系列の用法の中に、新たに確立された用法を検討し、さらに先に示したド系列・ア系列との接点を分析していくこととする。

3.1 指示詞の歴史的変化

日本語指示詞の歴史的変化は金水・岡崎・曹(2002)では次のように図示される。

(16) a. 上代

	可視的	不可視的
非依存的	コ, カ	ソ
依存的	—	ソ, シ

b. 平安時代

	可視的	不可視的
非依存的	コ, カ, ア(ソ)	カ, ア(ソ)
依存的	—	ソ

筆者はこれまでソ系列・カ(ア)系列を中心に、聞き手領域指示用法の獲得過程やこの表からだけでは特に見えない、話し手と聞き手の知識の問題を扱ってきた。本節以降、それらの用法の変化がソ系列の前節までに見た働きとどのように関連するかを捉え直し、4節ではそれらの変化の要因を考察する。

3.2 聞き手領域指示用法

3.2.1 現場指示

藤本(2008 a)では、文脈照応用法から聞き手領域指示の用法を獲得したことを述べた。ここでは、再度そのプロセスを見ておく。まず、本稿では、次のような例をソ系列の聞き手領域指示の用法と呼んでいる。

- (17) (聞き手の近くに醤油がある) ねえ、そのお醤油、取ってくれない？

このような聞き手領域指示のソ系列は、上代に確例がない。平安時代に入り、(18)のような「ソコ」の例を中心に、聞き手自身や聞き手の近傍の対象をソ系列が表す例が確認できるようになる。そのため、(16 b)の図では、可視的かつ言語的文脈に非依存的な対象を指示するものとして、「ソ」が挙げられることとなる。

- (18) a. [少将→女君]「知らぬわざしてまるもごうじにたり。そこも寝ぶたげに思ほしためり。」【あなたも眠そうにお思いなさっているようだ。】(落窪物語、第一、80頁)

- b. [軒端萩] 碁打ちはてて結さすわたり、心とげに見えてきはぎはとさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、[空蟬→軒端萩]「待ちたまへや。そこは持にこそあらめ、このわたりの劫をこそ」など言へど【お待ちなさないな。そこはせきでしょうに。このあたりの劫を先にしましょう。】（源氏物語，空蟬，1：121）

さらに金水（1990；2008）で説明されるように，コミュニケーションにおいて，聞き手の知覚というものは，話し手にとってある程度仮定に基づいて把握されるものである。そしてこれは知覚に限らず，知識に関しても，同様のことが想定できる。ソ系列は，現実世界を探索の対象とするコ系列・ア系列とは異なり，現実世界でなく，先行する言語的文脈や聞き手といった要素によって新たに仮定して設けた「仮想現実」の対象を指し示すと考えられる。

3.2.2 非現場指示

先に見た現場指示での聞き手領域指示用法に加え，文脈照応用法のような非現場指示においても聞き手との対立的視点を明らかにするためにソ系列が用いられる例がある。

(19) A：『Vの喜劇』を読みました。

B：その本もいいけど、『XYZ 日常生活』の方が面白いよ。

同じような例は，(9a)のような古代語の文脈照応用法でも確認できる。このような例もソ系列の現場指示を生じさせる契機となったと見られる。以上見てきたソ系列の聞き手領域指示は，金水（2000）などで指摘されるように，文脈照応用法からの派生として「ソ」が「あなたの－」という記述的意味を持っているとも考えられる。

そしてこれら聞き手領域指示は，聞き手の知覚・知識などを話し手にとって，直接，把握しうる知識・知覚，現実というものとは別に仮定して把握するという点で，2節で見た用法と連続的であることが分かる。

3.3 ソ系列と他の系列との接近

3節の初めに述べたように，ソ系列の用法のうち曖昧指示表現の一部は次の(20)のようにド系列と結びつき，観念指示用法に関しては，先の(15)のようにア系列と結びついている。

- (20) 食べ物にこだわるというのは，どこそこの店の何々が美味しいという話をテレビや雑誌で仕入れて，それを並んで食べるというようなことではないと思う。

橋本（1966）において「内容がありながら指示できない」と言われるように，ド系列を用いることは，話し手がその指示対象を知らないということを明示しており，2節で取り上げたソ系列の曖昧指示表現の使用と一部と重なる。

また，観念指示用法では，可視・不可視の対立であったものが，話し手にとっての直接的知識はア系列を用いるということから，不可視であってもア系列が用いられるようになり，ソ系列の観念指示用法は，一部の慣用表現を除いては見られなくなる。ただし，「その節」のような表現の初出が中世期に入ってから確認できるなど，ソ系列がそれまで持っていた働きを失ったわけではないことも注目される。

4 歴史的変化の背景と要因

ここまで述べてきたソ系列の歴史的変化の要因として，本稿では聞き手への配慮の明示化と，直示の範囲の変化という二点を考える。

4.1 聞き手への配慮の明示化

3節で取り上げた聞き手領域指示用法確立の背景には、聞き手への配慮が言語表現に明示化されるようになったことが考えられる。この流れは指示詞に限らず、絶対敬語から相対敬語へという変化にも見られる。指示詞においては、もともと話し手基準で用いられていたものが、次第にコミュニケーションの相手である聞き手に対する配慮を言語表現に反映させるようになり、たとえば、聞き手の近傍にある対象に関しては、聞き手領域に含まれるものとして、ソ系列を用いて指示するという聞き手領域指示の方法をとるようになる。

また、同じように話し手が聞き手との対立を表すためにソ系列が用いられるようになったものとして、談話に新規導入された要素の扱いが挙げられる。現代語では、談話によって言語的に新規導入された要素に関しては、導入した側でない場合、その談話中では新規導入を明示的に示す必要がある。ここでも指示詞ではソ系列を選択することにより、話し手は自身が導入した要素であるか、聞き手が導入した要素であるかをはっきりと区別している。これに対し、古代語では、当該談話の途中であっても、ソ系列ではなく、カ（ア）系列を用いることがあり、現代語とは対象の知識の扱いと切り替えのタイミングにずれが見られる（藤本 2008 b）。このことから、現代語では聞き手との知識の対立を厳密に表す向きがあることが金水他（2008）でも指摘されている。これらの指示詞は相手との距離を保つために、自分と相手とを区別して表そうとする聞き手への配慮によって用いられると考えられる。

4.2 直示の範囲

3.3でも取り上げ、(16b)の不可視・非依存的に見られるカ（ア）からも分かるように、平安時代には直接経験を表すためにア系列が用いられるようになっている。もともとの直示の範囲が、今、直接知覚・感覚できる対象、すなわち可視的なものであったのに対し、次第に経験や知識といった、今、直接知覚・感覚できる対象ではない対象、すなわち不可視的なものも含め、直示は拡張されたと考えられる。また3.2で取り上げた聞き手領域指示に関しても、可視・不可視を超えて、話し手と聞き手との対立的視点を表すという働きを持っており、これによっても、直示の範囲には体系変化の契機が生じたと考えられる。

5 ま と め

本稿は、ソ系列指示詞の各用法の関連性を、仮想現実の設定という観点から述べた。指示詞ではありながら、ダイクシスではないソ系列は、先行する言語的表現によってのみ外延が定められると考えられる。そして外延の定まらない場合は不定項として扱われ、曖昧指示表現や観念指示用法となり、また外延が定められる場合は文脈照応用法として働く。さらに聞き手領域指示の用法も、これらと連続したものとして考察した。

そして(16)で捉えられていた指示詞の歴史的変化の要因として、上代、平安時代において、もともと聞き手は指示詞の使い分けには関与していなかったのに対し、次第に聞き手への配慮が言語表現に表されるようになる点を指摘した。話し手からの遠近だけでなく、たとえば聞き手に近い範囲にある対象についてはソが用いられるというようになると、コ対アのみで表していた現場の対象に対して、ソが加わる。そのため、可視対不可視として分かれていた指示領域に体系変化の契機が生じることとなったことを指摘した。

調査資料

大和物語（日本古典文学大系）

萬葉集、落窪物語（新日本古典文学大系）

源氏物語（新編日本古典文学全集）

参考文献

岡崎友子（2002）「指示副詞の歴史的変化について－サ系列・ソ系を中心に－」『国語学』, 53-3（210）, pp.1-17, 国語学会

岡崎友子（2006）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について－ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考－」『日本語の研究』, 2-2, pp.77-92, 日本語学会

金水敏（1990）「指示詞と談話の構造」『言語』, 19-4, pp.60-67

- 金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』，6-4，pp.67-91，自然言語処理学会
- 金水敏（2000）「指示詞－「直示」再考－」中村明編『現代日本語必携』，別冊國文學（2000・11），No.53，pp.160-163，學燈社
- 金水敏・今仁生美（2000）『意味と文脈』，現代言語学入門4，岩波書店
- 金水敏・大阪大学チーム・ダイクシス（黒木邦彦・大田垣仁・藤本真理子・清田朗裕・森勇太）（2008）「ダイクシス，現実，仮想現実」，第三回指示詞研究会，岡山大学
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚（2002）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究－日本語・韓国語・トルコ語」生越直樹編『シリーズ言語科学4 対照言語学』，pp.217-247，東京大学出版会
- 金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3，日本認知科学会編，pp.85-116，講談社（金水敏・田窪行則編『指示詞』日本語研究資料集【第1期第7巻】（1992）ひつじ書房，pp.123-149に再録）
- 金水敏・田窪行則（1992）「〈解説篇〉日本語指示詞研究史から／へ」金水敏・田窪行則編『指示詞』，日本語研究資料集【第1期第7巻】，pp.151-192，ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則編（1992）『指示詞』，日本語研究資料集【第1期第7巻】，ひつじ書房
- 坂原茂編（2000）『認知言語学の発展』，ひつじ書房
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』，研究社
- 田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』，Vol.3，No.3，pp.59-74
- 橋本四郎（1966）「古代語の指示体系－上代を中心に－」『国語国文』，35-6，遠藤嘉基博士還暦記念国語學特輯号第二，pp.329-341，京都大学文学部国語学研究室国文学会，（『橋本四郎論文集 国語学編』（1986）角川書店，pp.209-227に再録）
- 橋本四郎（1982）「指示語の史的展開」『講座日本語学2 文法史』，pp.217-240，明治書院，（『橋本四郎論文集 国語学編』（1986）角川書店，pp.228-250に再録）
- 藤本真理子（2008 a）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』，第90輯，pp.40-53，大阪大学国語国文学会
- 藤本真理子（2008 b）「中古語のカ（ア）系列とソ系列－観念指示用法の推移－」日本語学会発表資料，日本大学
- 藤本真理子（2009）「「古代語のカ（ア）系列指示詞」再考」『日本語文法』，9-2，pp.122-138，くろしお出版
- ヤコブ L. メイ著 澤田治美・高司正夫訳（1996）『ことばは世界とどうかかわるか－語用論入門－』，言語学翻訳叢書【第2巻】，ひつじ書房

付記

本稿は，日本言語学会（2010年，於筑波大学）での口頭発表に基づく。